絵本画家以前の赤羽末吉
－1910～1961の記録を中心に－

久保木 健夫

Suekichi AKABA's Early Career Before Becoming a Picture Book Painter : Focusing on Records from 1910 to 1961

Takeo KUBOKI

本論は，「絵本」と「美術」というテーマから継続的に行ってきた研究の一環である。絵本について，絵本画家を中心にして，美術や美術教育の意義について考えるところに本研究の目的がある。

赤羽末吉は，戦後の日本を代表する絵本画家であるが，最初の絵本作品を発表したのは，1961(昭和36)年，51歳の時と比較的遅い出発である。それは，赤羽が生きた時代が，第二次世界大戦という過酷な時代であったことに拠っている。

本論は，この絵本画家以前の赤羽の半生を辿りながら，赤羽の芸術観や，絵本に託した想いについて考えていく。

1. はじめに

本論は，「絵本」と「美術」というテーマから継続的に行ってきた研究の一環である。絵本について，絵本画家を中心にして，美術や美術教育の意義について考えるところに本研究の目的がある。これまでに研究対象としては，主に赤羽末吉や，安野光雅，等の絵本画家をとりあげてきた。

本論の研究対象である赤羽末吉（1910～1990）は，国際的に活躍をした戦後の日本を代表する絵本画家である。赤羽が最初の絵本を発表したのは，1961（昭和36）年，51歳の時であり，以後29年間を絵本画家として活躍している。それ以前の赤羽が生きた時代は，第二次世界大戦という過酷な状況にあった。1932（昭和7）年，22歳に旧・満州[1)]（現・中国東北部）へ渡った赤羽は，そこで可能な限りの美術に関する活動を，帰国するまでの15年間にわたって行っている。中国から引き揚げてきたのは1947（昭和22）年，37歳のことであり，その後，終戦直後の混乱を乗り越え，10年後にあたる1961（昭和36）年に絵本画家としてデビューするのである。

この絵本画家以前の51年間という歳月は，相当に長い年月であり，赤羽の絵本を考える上でも決して無視できない時間だと思われる。

本論は，これまでの研究の一環として，この避けては通れない赤羽の絵本画家以前の時期（1910～1961）に焦点を当て，その半生を辿りながら，赤羽の形成した芸術観や，後年の絵本に託した想いについて考えていくことに目的がある。

また，赤羽に関する資料には，赤羽自身が残した絵本作品の他に，絵本論やエッセイ，雑誌やカタログ等に掲載された解説およびインタビュー，赤羽と関わりのあった様々な関係者によるコメント等があげられる。こうした資料から，絵本画家以前の赤羽が行った美術に関する活動が，明らかになるものと考えている。

2. 赤羽の生い立ち

(1) 誕生

赤羽は1910（明治43）年に東京都千代田区神田美土代町に生まれた。父・青田小太郎，母・さとの四男で，8人兄弟の末子である。赤羽自身は，そのために末吉という名前が付けられたのだろうと述べている[2)]。物心がついた頃には深川で暮らしていた。父親はこれといった仕事をしていた訳ではなかったが，町の顔役であった。赤羽が生まれた頃には，すでに父親が高齢で，家も疲弊していたため，1923（大正12）年の12歳の時に，赤羽は子どものいない赤羽家へ養子に出されることとなった。これ以降，赤羽の姓を名乗ることになる。

(2) 小学生の頃　―映画・紙芝居・絵に対する憧れ―

小学校は門前仲町の臨海小学校へ通っていた。5歳頃から映画を見るようになり，栗島すみ子，岡田嘉子，鈴木伝明，板東妻三郎，等の映画を，よく浅草まで見に行っている。また，赤羽は紙芝居が好きで，「西遊記」等に強い印象を持っている。当時の紙芝居は現在のものとはかなり異なっており，赤羽はその様子を次のように述べている。

> 横長のガラス張りのスクリーンがあり，両脇とうしろに背景のようなものがあって，人物は長方形の紙にかいてあり，箸のようなものに裏表，両面はってある。くるりと回すと向きが変わったり，ひきぬくと表情が変わったり・・・。今の紙芝居のように単調ではなく，声色やドラや拍子木なんかも適当に入ってずっとドラマティックで，歌舞伎的なのさ。まさに紙でやる芝居だったね[3)]。

こうした赤羽の言葉を見ると，赤羽が興味を示した当時の紙芝居は，現在で言うところのペープサートに近いものであったと推測される。赤羽は，自身の兄が「西遊記」の絵を描くのが上手だったのに比べて，自分はそんなに上手には描けなかったのだが，その頃から絵に対する一種の憧れがあったと述べている[4)]。そして，よく舞子の絵や，歌舞伎芝居の絵の模写を描いたりもしていたらしい。

また，芝居に夢中になって新橋界隈へ通っていたこともあり，その時は舞台の装置家になる夢を抱いていた。その後，中学生になると，文章を書くことも好きであったため，

友人と同人誌を作ったこともあった。

(3)　中学生の頃から旧・満州へ出国まで

(3) -1　関東大震災

1923（大正12）年は関東大震災が起こった年である。赤羽は中学1年生（12歳頃）の時にこの震災を体験している。深川八幡近くの門前仲町にいた赤羽は，永代橋，本所，洲崎という十字路の三方から火が出たため，残る月島方面へ向けて家族とともに避難した。地震は，「遠くから海鳴りのような響きが続き，大きな上下動があって，さらに横ゆれのはげしいのが何度もあった[5)]」というものであった。赤羽一家は火に追われて，深川と月島をつなぐ隅田川の河口にかかる相生橋へ出た。赤羽は，はやく水に入らないと危ないと思い，家族と共に堤に抜けて水に入った。火はだんだん迫ってきて，ついには橋が人々もろとも炎上した。「私はこの目でハッキリ見た。その地獄図というものをみた[6)]」と赤羽はその時の様子を述懐している。

(3) -2　『ジークフリード』の思い出

そうした中学生時代に，赤羽はドイツの映画『ジークフリード』を見て感動している。この『ジークフリード』は，ドイツの国民的な英雄叙事詩「ニーベルンゲンの歌」を監督・フリッツ・ラングが映画化したものである。フリッツ・ラングは，後年アメリカへ渡り，「メトロポリス」等の作品を手がけたことで知られている。

この『ジークフリード』の物語は次の通りである。ネーデルランドの王子ジークフリードが，少年時代より王宮を出て遠征を行い，ノルウェーのニーベルンゲン族を倒してその財宝と魔法の隠れ蓑，名剣バルムンクを奪う等の活躍をする。また，悪竜退治を行い，その際に魔力のこもった返り血を浴びて，いかなる武器も受け付けない無敵の体となる。しかしその時，背中に菩提樹の葉が１枚貼り付いており，その1点だけは唯一の弱点となった。その後，数々の武功を立てたジークフリードは，ブルグント王のグンターの妹クリームヒルトに求婚し，見事結婚してネーデルランドの王位に就く。10年後，ブルグントの王宮で諍いが起き，クリームヒルトからまんまと弱点を聞き出した重臣ハーゲンは，ジークフリードの背中を長槍で突いて暗殺する。クリームヒルトはその傷を見て犯人を見抜き，復讐を誓う。

この映画は「第1部ジークフリード」と「第2部クリームヒルトの復讐」の二つに分かれた作品であるが，赤羽が夢中になったのは，この第1部の方である。赤羽は，関東大震災や第二次世界大戦に突入していく直前の不穏な時代の中で，この冒険活劇に夢中になり，少年時代に様々な夢を想い描いたのであろう。後年（1980（昭和55）年），赤羽は国際アンデルセン賞画家賞授賞式の挨拶で，この少年時代の『ジークフリード』の思い出をエピソードとして述べている[7)]。そこでは，「ファンタジックな美しい画面」や「壮大なロマン」に感動したことが語られている。そして，この時のスチール写真を第二次世

界大戦で失うまで大切に持っていたこと，帰国してからも恐竜退治の場面を何度となく絵に描いたこと等を明らかにしている。赤羽は，子どもの絵本の世界に入った理由として，この少年時代に見た『ジークフリード』の影響が大きかったように思うと，自身について述べている。

過酷な時代背景の中で生まれたこの映画作品は，赤羽のような少年に大きな夢を与えている。しかしその反面，当時のナチス・ドイツの指導者達からは，国威掲揚という側面によって圧倒的な支持をこの作品は受けており，そうした事から，現在では批判的な意見があることも事実である。

(3) -3　短期間の絵の修行時代

赤羽の絵は，ほとんどが独学である。絵の勉強については，旧・満州へ渡る以前の青年期に，帝展（現・日展）系のあまり有名でない先生のもとで，約1年間日本画を習ったことに加え[8]，美術の研究所で3ヶ月間デッサンを学んだだけである[9]。その修業時代についても，旧・満州へ渡る前の青年期ということ以外には，詳細な年代については不明である。

赤羽が専門的な絵の手ほどきを受けなかった理由には，きわめて困難な時代を生きてきたという状況的な要因と，「私はナレだけでさらさらかく絵は，さける」といった赤羽自身による性格的な要因の二つがあるように思われる。赤羽は絵を描く自身の姿勢について次のように述べている。

> 私はナレだけでかく絵は好きではない。絵というものは，一本一本の線はたどたどしくても，心をこめてかくものだと思う。どんな人でも，ある程度やっていれば技術は身につく。そのナレだけでかく絵は，絵ではないというのが，私流の考え方である。相手のもっている性格を視(み)つめてかこうとすれば，たどたどしくなると思う[10]。

赤羽のエッセイを見るとわかるが，人から絵の手ほどきを受けることについて，赤羽は当初から拒否していた訳ではない。やはり最初は，絵の先生について勉強しようと試みている。ただし，赤羽がついたその帝展系の先生は，絵具の準備や使い走りをさせていただけでなく，席画会と称した修行を下積みの画家たちにさせていた[11]。その席画会というのは，下積みの画家たちが料亭へ行き，お得意様の旦那衆の前でサラサラと何枚でもまったく同じように絵を描いて見せるもので，それを見た旦那衆が，感嘆してその掛け軸等の絵を買っていく，という修行であった。そうした世界に赤羽は強い違和感を抱いたのである。当時の困難な時代状況を考えると，絵画の慣習がマイナスの形で行われていたりすることや，絵画技術の確かな修得者が，情報量や経済力，社会情勢の限界によってきわめて少数であったりしたこと等が原因として推測される。また，画家の暮らしぶりも決して生やさしいものではなかっただろう。しかし，そうしたことを考え合わ

せても，赤羽にとっては，この違和感は，後年になっても拭いきれるものではなく，ナレだけで描く絵に対する一種の強い拒絶感となって，生涯持ち続けることとなるのである。

3. 旧・満州における美術に関する活動

(1)　旧・満州へ

日本国内は，関東大震災後，壊滅的な打撃を受けた東京市の復興計画によって，東京の姿は一変し，当時まだ残っていた江戸情緒は一掃された。また，昭和初期における再三の金融恐慌，その後の世界恐慌によって，日本経済はインフレ傾向を加速させ，街には失業者があふれかえるようになっていた。赤羽の東京での生活は，それほど深刻なものではなかったということだが[12]，こうした状況の中，旧・満州の大連で運送業を営んでいた姉夫婦を頼って，赤羽も旧・満州へと渡ることになる。1932（昭和7）年，赤羽が22歳の時であった。この時期の中国大陸は，次第に緊張が高まってきた時期であり，この前年の1931（昭和6）年には，満州事変が起こっている。赤羽が渡ったのはちょうどその翌年で，満州建国宣言が出された年である。この頃を境にして，日本政府は多数の日本人を満州移民として送り込むようになっており，旧・満州では，在郷軍人らによる満州開拓団が編成されるようになった。赤羽も，こうした時代の波にのみ込まれていくのである。

(2)　大連（たいれん）での運送屋時代

旧・満州へ渡った赤羽は，姉夫婦の伝手（つて）で，その知人の運送屋に勤めるようになった。姉の夫は，将来は赤羽にのれんを分ける心積もりだったようで，そのための修行に出されたのである。赤羽はその運送屋の二階に下宿することになった。

大連（たいれん）は無税港で，ここに揚がる荷物は税関の検査を受けることになっていた。それを通関と呼ぶが，これが港の運送業者の大きな仕事であった。例えば，この港に揚げる荷物は税がぬけるので，先に税のかかった酒等は，この港に揚がった証明があると税が返されるということだった。この仕組みを利用して，一種の脱税や密輸が行われたりしていた。税官吏も買収されて財を成す者もいたり，会社も税関あがりを雇ったりもしていたという。結局，税関と運送屋とは密接な関係があったのだが，若い税官吏の中には運送屋を人間扱いしない者がいたりして，強くはなかったが鼻っ柱の強かった赤羽は，しばしば衝突していたようである。

しかし，日本に比べると，大連（たいれん）は埃っぽくて殺風景で，夜は街に灯もともっていないあり様で，赤羽は寂しくてやりきれなくなっていく[13]。そこで毎晩，喫茶店へ行ってはレコードばかり聴くようなったので，周囲からはレコード・ボーイとあだ名されるようになった。

そんな時に，偶然街の古本屋で，初山滋の絵が表紙に付いた『コドモノクニ』を見つける。赤いバックの中央に裸の子が描かれ，四隅に玩具をあしらったものだった。これを見た時，赤羽は「私のからだにポカッと灯がともった[14]」と述べており，『コドモノクニ』を見るような家庭に育った訳ではなかったが，「どこかでみた絵が心に残り，それがここでつながってポッと燃えだしたとしか考えられない[15]」とその時の心境を語っている。赤羽はその本を買い取ると，自分の部屋の白い壁に貼って飽きることなく眺め続けた。それも，表紙を切り離すことが耐えられなかったので，一冊を丸ごと壁にピンで留めていたということである。

この出来事があってから，赤羽は短い期間に修行して以来，そのままになっていた絵を再び描き始めるのである。赤羽が好んで描いた題材は，旧・満州や，子どものいる風景だった。

(3)　搬不倒(バンブタオ)集団

絵を描くようになった赤羽は，大連(たいれん)の絵描きグループに入るようになった。それが搬不倒(バンブタオ)集団である。大連(たいれん)で早くより満州土俗の研究で知られていた画家・甲斐巳八郎(みはちろう)を中心とした満州土俗の研究グループで，赤羽はこの甲斐と知り合い，グループに参加するようになるのである[16]。搬不倒(バンブタオ)とは，中国の農民に伝わる泥人形のことで，日本で言う起き上がり小法師のようなものである。農閑期を利用して，農民の手で作られるこれらの人形は，産地によってその形状はまちまちであった。搬不倒(バンブタオ)集団の影響もあって，赤羽は旧・満州の各地を訪ね歩き，この泥人形を蒐集するようになる。

こうして，旧・満州へ渡ってから3年後の1935（昭和10）年に，赤羽は結婚をしている。当時，赤羽は25歳であり，妻・良子(りょうこ)は19歳であった。

しかし，赤羽は心が絵の方に傾いてくると，だんだん運送屋の仕事がいやになってくる。そしてある時，満州電信電話会社の仕事を運送屋で受けたのをきっかけに，ちょうど絵描きを欲しがっていた会社の担当者の目にもとまって，そのまま入社することとなった。この満州電信電話会社とは，新京（長春）にあった電信電話放送をする特殊会社で，当時は，俳優の森繁久弥もアナウンサーとして所属していた。赤羽はそこの調査課に配属され，広報宣伝の仕事をすることになった。しかし実際に入社してみると，はじめの5年間は絵を描く仕事ではなくて，統計図表やグラフを描いたり，ソロバンまでしなければならない仕事だった。

ちょうどこの頃に，赤羽は，画家・太田洋愛(ようない)[17]とも知り合っている。この太田は，赤羽より3年前の1929（昭和4）年に旧・満州へ渡っており，旧・満州国建国と同時に文教部の編審官室に招かれて，教科書づくりに携わっていた。戦後，帰国してからは，日本におけるボタニカル・アートの第一人者となっている。

(4)　影絵人形芝居

搬不倒(バンブタオ)集団に参加するようになった赤羽は，絵の制作とともに，泥人形のような中国の民俗や文化に対して，強い関心を持つようになった。そんな時に，大連(たいれん)郊外の漁村で偶然眼にした古老の演じる影絵人形芝居に感動し，何日か通いつめるようになる。その影絵人形芝居は，赤羽によると[18]，横長の紙に糸がついているスクリーンがあり，その後ろに5本の管のある桐油の入った油壺があって，火をつけると炎がゆらゆらと燃えはじめる。その中を人形が動くのだが，その人形は驢馬の革を薄くなめして桐油が刷り込んであり，それだけを見るとたいしたことはないが，光をあててみると非常に美しい色彩が出るのである。その渋い古代色の人形が，胡弓や，むせぶような歌声にあわせて動き出すと，非常に幻想的な世界が立ち現れるのである。

赤羽は，この影絵人形芝居が，子どもの頃に東京で見た紙芝居と様式が非常によく似ていると述べている。赤羽の影絵人形芝居に対する共感は，子ども時代の原体験に根ざしていることがわかる。

赤羽が大連(たいれん)の郊外で，はじめて影絵人形芝居と出会ったのは，満州電信電話株式会社に勤める以前のことだったようである。そして，この影絵に夢中になった赤羽は，数日通いつめるだけでは飽き足らずに，ついには研究対象として，数年かけてこのテーマを追い求める事となる。その成果は『影絵芝居の話』という，満鉄鉄道総局の観光業書の一冊としてまとめられた。

『影絵芝居の話』は，中国やアジアを中心とした世界各地における影絵の起源等，影絵に関することについて調べたものである。他に，影絵に必要な用具や演技，楽器，照明，人形の特徴や作り方，さらには座員の生活状況まで，その調査は詳細にわたっている。

この影絵は元来が農民芸術であり，すでに赤羽の執筆当時から，衰退の兆しが現れており，本書の中でも再三にわたって，赤羽はその擁護を求めて訴えている。

(5)　満州国国展

影絵は，赤羽の旧・満州時代を特徴付けるテーマである。この影絵に対する追求は，執筆活動だけではなく，絵画制作によっても試みられている。1939（昭和14）年から1942（昭和17）年の3年間にわたって，赤羽は満州国国展に数回にわたって絵画作品を出品している。そして，そのうち特選を3回受賞しているが，その受賞した作品の一つが，「影絵人形芝居[19]」と名付けられた作品である。この作品が制作された正確な年代等の記録は残されていないのだが，この3年の間に制作，あるいは出品されたことは確かである[20]。このことから考えると，1940（昭和15）年に『影絵芝居の話』が出版されていることから，赤羽は，ほぼ同時期に，影絵をテーマにした制作活動と研究活動を並行して手がけ，発表していたことになる。しかし，この他に，一体どのくらいの数の絵画作品を赤羽がこの期間に制作して，出品していたのかは不明である。記録に残っているのは，特

選を受賞したこの三つの作品のことだけであり，「影絵人形芝居」の他に，あと「開拓団の子どもたち」（屏風一曲）と「瑠璃宝塔」の二つの作品が制作され，特選を受賞したことがわかっている。

この満州国国展には，油絵画家の梅原龍三郎や安井曾太郎，日本画家の前田青邨や小林古径，等が日本から審査委員として赴いている。赤羽は自身のエッセイの中で，梅原が北京飯店の一室を借り切って豪壮に油絵を描いた有名なエピソードに触れているが，独学で進んできた赤羽の絵画が，日本における正統的な美術界のリーダー達によって，特選を3回受賞する，という形で認められたことは，赤羽にとっては何よりも自信となる出来事であったと思われる。

(6)　黄土坡（おうどは）協会

満州国国展で特選を受賞した赤羽は，同様に受賞したその他の若い芸術家達と共に，黄土坡（おうどは）協会を結成し，満州国国展とは別に，「黄土坡（おうどは）展」という名称で自分たちで展覧会を開催するようになった[21]。メンバーは計7名で，斉藤英一，白崎海紀，郡菊夫，関合正明，佐竹禹南，そして日本画家の近藤清法と赤羽末吉である[22]。年に約2回の展覧会を開いたが，その1週間前になるとお互いに作品を持ち寄って，仲間同士で共同審査を行った。赤羽によれば，悪い作品は落とし，なおしたらモノになりそうな作品は，開場の前日にもう一度持参して共同審査を行い，当落を決めていた，ということである。そのため，よい仕事をしてきた者は傲然（ごうぜん）としており，論評は沸騰して喧嘩になることさえあったようである[23]。その後，画家だけでは意見が偏るということで，詩人や作家を会友にして芸術論を戦わせるようになった。詩人では，詩の雑誌『歴程』を創始した逸見猶吉（ゆうきち），作家では，北村謙次や壇一雄らがいた。中には東大の美学出身の画友等もおり，赤羽はこれらの人々との交流を通して，自身の芸術論を形成していったのである。

(7)　チンギス汗廟壁画制作のための内蒙古地区取材旅行

満州国国展における度重なる特選受賞によって，赤羽の勤務先だった満州電信電話株式会社も，いい宣伝になることから，赤羽の配属先を広報関係の部署へと異動を行い，社員募集のパンフレットや，旧・満州各地を写真機一つぶらさげて取材旅行に行かせる等，実に自由な待遇を与えることとなった。赤羽はその後，終戦までの5年間をこの部署で過ごすことになる。こうした待遇も，満州国国展の特選受賞がものをいったのである。

このような恵まれた状況の中で，赤羽はさらに，内蒙古地区におけるチンギス汗廟の建立計画の一環として，壁画制作を満州国政府から委嘱されることになる。この壁画は「蒙古黄金史」とも言うべきテーマによって，10枚の壁画作品を制作し，廟の本堂わきの廊下を飾るというものであった。この壁画制作の計画には，赤羽以外にも5名の画家が委嘱されており，赤羽はその中の1名であった。そして，赤羽は，その壁画制作のために，1943（昭和18）年に内蒙古地区へ取材旅行に出かけている。結局，この壁画は，1枚制作

したくらいで終戦となり，たち消えとなってしまった。しかし，この時に取材した写真類やスケッチ等を，赤羽は終戦の混乱の中でも大切に保管し続けており，これらが，戦後の1967（昭和42）年に絵本作品として制作された『スーホの白い馬』の資料となったのである。

ちひろ美術館の徳永美幸によると，この取材旅行へ出かけた時と同じ時期に，新聞に発表した次のような記事が残っているということである[24]。ちひろ美術館は絵本専門の美術館として知られているが，1998（平成10）年に赤羽の全遺作，約6,800点が赤羽の遺族から寄贈されている。この中には，絵本原画の他に，習作やタブロー作品，スケッチ等も含まれている。

赤羽はここで，農安（のうあん）という土地を訪れた時の印象とその時のいでたちについて述べている。掲載された新聞や詳しい年代については不明である。

> 城裏一足踏み込むと土，土，土のつらなりである。ボクボクと浮く土の道，両側は土の塀，土の家であり切れては続き切れては続く。・・・私は，日向葵（ひまわり）の香ばしい実をコツンコツンと噛みながら，一日の気ぜわしい旅であり又落ち着かない天候等に禍いされて，到底この複雑多彩の時代調を画筆に写せぬことをはがゆく思いながら歩いた。この町の南と東は，突っ走るように坂になり，その先は突っ放したような原野である。・・・私は満州を代表する美しさは，この蒼空（そうくう）と黄土色の土とのコントラスト以外にはないと思う[25]。

> 箒（ほうき）草の様な頭に，よれよれのバーバリー，それに歩く度にボトンボトンと音のする大きな水筒と，郵便鞄大のカルトンとを十字に掛け，右手にむすびのはいった風呂敷包を提げ，左手にコウモリをもったその日のいでたちを（土地の人々は）なんと思ったのであろう[26]。

この取材旅行で赤羽は，旧・満州国のはずれにある赤峰（せきほう）という町から興安嶺（こうあんれい）を越えて内蒙古の貝子廟（ベイツミャオ）という所へ赴いた。「草原に立ってグルリとみまわすと，一方は暗雲，一方は晴天，一方はスコールというような天候の変化が一望にみわたせるような，地球の半分がいっぺんに見えるような，雄大なスケールの蒙古に感激した[27]」と，この時の感動を自身のエッセイ『絵本よまやま話』に記している。

また，この取材旅行の帰路に，赤羽は北京に立ち寄っている[28]。赤羽によると，ブレーキのきかない古爆撃機に乗って，砂漠や万里の長城を下に見ながら張河口（ちょうかこう）に降り，さらに大同（だいどう）の石仏を見て，北京に出た。すでに戦局は，日本にとっては下り坂となっており，大同（だいどう）ではははるか遠方で砲声を聞いている。また，北京と天津の間では，鉄道爆破があった。しかし，北京はきわめてのどかであった，と赤羽は述べている。夏の夜，ポツンと出ていた屋台で，赤羽はうどんか何かをすすったりしていた。赤羽たちのような絵描き

仲間にとっては，北京は京都と同じであった。どの一画をとっても，どの店をとっても絵になる街であった。

(8)　熱河への取材旅行

旧・満州時代に，赤羽は数多くの取材旅行に出かけたようだが，詳細は不明である。そのうち，記録として残っているものの中に，熱河への取材旅行[29]がある。熱河には，清朝末期の康熙帝の作った離宮がある。赤羽によると，その離宮の塀は左手に延々と続き，右手には武烈川が流れ，その向こう側に黄色い瓦や黒い瓦の寺（ラマ寺）が，山並みを背にしてキラリキラリと光っている。この地は，満州国国展の審査員としてやってきた梅原龍三郎や安井曾太郎も，合間に立ち寄って絵を描いたりしたことでも知られている。赤羽はこの地の印象を，「ここの空は幕を引いたような紺碧の空で，道は桃色にトロトロとのび，トンボの影は真紫にゆらぐふしぎな色の秘境である[30]」と述べている。

赤羽はこの地でスケッチをしたりしているが，そこに，瑠璃塔という丘の上に建っている塔があった。赤羽自身による記述がないので推測だが，満州国国展へ出品して特賞を受賞した「瑠璃宝塔」という作品は，この塔がモチーフになっているのかもしれない。

(9)　その他の取材旅行および絵と文による美術活動

赤羽はこうした制作，研究活動の他に，様々な新聞や雑誌等の原稿を書いている。それらの原稿は，中国の民俗に関するものが多く，文章で書くだけでなく，挿絵のようなイラストを併せて描いている。こうした旧・満州時代における絵や文によって研究・制作を行う赤羽のスタイルが，後年の絵本画家として活躍する素地となっているようである。

これらの活動の全貌は明らかではないのだが，いくつか記録に残っているものを見ていくとことにする。

(9) -1　大阪毎日新聞の記事

影絵の擁護を求めた原稿が，大阪毎日新聞にタチキリで連載されたと赤羽は述べている[31]。これは満州鉄道の観光業書として配布された『影絵芝居の話』や，満州国国展へ出品した絵画作品「影絵人形芝居」と，ほぼ同時期のことのようである。しかし，記録に残っているのはそれだけで，その記事の内容についてはわかっていない。

(9) -2　「移民村の子供たち」（文芸誌『満州芸文』所収）

赤羽は，『満州芸文』という文芸雑誌に「移民村の子供たち」という題で原稿を書いている[32]。この『満州芸文』は，赤羽の記憶によると，池島信平が中心となって，文芸春秋社から出版されていた雑誌である。ここで赤羽は絵と文を発表したと述べているが，絵の方の原稿や，その記事が発表された年代についてはわかっていない。赤羽による「移民村の子供たち」の文章は次の通りである。

雪の東北から移民した子供たちです。その子供たちが，はじめて雪の積もらない

満州の冬にでっくわして，キットびっくりしたにちがいありません。

お正月になっても雪室の遊びもならず，

「チェッ，雪だるまもできないじゃあないか。」

と，小さな不満をもらしたことだと思います。

しかし，子供はできないことに，いつまでもこだわっているはずがありません。春になると外へ飛びだし，土の家，土の塀，土の庭－黄色い土にかこまれて，コマを回し，マリをつき，元気で飛びはねます。

農繁期には，小さな手を重ねて，お手伝いもします。私は思うのです。遠からずこうした土の子らの手によって，高粱や泥柳を材料にした子供の遊びが生じてくるのではないかと思います。

念木や海鼠引きのような遊戯も，この地に継承すると思いますが，また雄大なこの地平線のなかから，黄色いモクモクとしたこの土のなかから，いろいろな遊戯をみいだし，美しい行事を生み出すのではないかと思います。

この茫々たる地平を背景に，素朴で大きく美しい祭りなどのくりひろげられるのは，想像するだけでもすばらしいと思います。

これは私が，南満昌図駅から西方四十六キロの地点にある昌図開拓団の最上団を訪れたときの印象であります。

最上は山形県の最上部で，さすがモンペの身についているのが美しく心ひかれます。

入植して一年というのに，すでに子供の服装に工夫したものがありました。

木綿のカスリで作ったもので，上衣は満服に似て，襟だけを協和服のようにすこし折ったものです。スボンの上部は満服のようにユッタリして，下部はそれのようにダブツかせずほどよく，カスリも形も美しく，着ごこちもよさそうで，冬は暖かく，夏は涼しいように思われる。

こうした小さな工夫も，新しくこの地に生まれる農民文化，生活文化のめばえかと思われます[33]。

赤羽は，ここでは開拓団の人々の姿に惹かれている。そしてこうした体験は，ここでも文章だけではなく，「開拓団の子どもたち」という題によって絵画作品としても制作され，満州国国展に出品し，特選を受賞している。

さらに付け加えると，この時に赤羽は，特に昌図開拓団の最上団，すなわち東北の人々のモンペ姿に強い関心を示している。当時，赤羽は，柳田国男，三木茂による共著『雪国の民俗[34]』という，雪国の人々の美しい風俗の写真集を手に入れて，雪国に対する憧れを抱くようになっている。この書籍は，「開拓団の子どもたち」を描いた際にも，資料にされたと考えられる。この雪国のイメージは，絵の主題として長く赤羽を捉えてお

り，後年になって最初の絵本作品『かさじぞう』を1961（昭和36）年に発表した時にも立ち現れて，作品の主要なイメージとしてその構造を支えている。

(9) -3　「中国の散髪屋」

赤羽はまた，「中国の散髪屋」という題で原稿を絵と文を書いている[35]。この原稿についても，執筆した年代や，その発表のされ方については定かではない。また，絵の原稿の方もわかってはいない。赤羽が『私の絵本ろん』の中で残している内容についても，多分に赤羽の記憶によるものであるらしい。その赤羽の記憶して書き留めた内容は次の通りである。

> 清の世祖は，一六六四年に北京を都と定めると，すぐその翌年剃頭辮髪の令をだした」。辮髪とは，頭のまわりを剃り，まん中に集められた毛を編んでひものように背にたらす。これは北方民族の風習だが，中原の人々は，これを蛮風と称していみきらった。だが「頭を留むる者は髪を留めず，髪を留めるものは頭を留めず」と，散髪屋をつれていって，強制的に辮髪にした。これに従わぬ者は首をはねた。これで各地に反乱が起こり，何万何十万の人が死んだ。そして清朝二百八十年，辮髪は定着した。この辮髪を強いたとき，北京にほど近い，楽亭の人たちが散髪に動員された。以後散髪屋はこの地から多くでたそうである。私はそれをたしかめるため，長春城内に点在する剃頭匠にきき歩いたが，ほとんどその出身地は楽亭であった[36]。

(9) -4　「新京の郷土玩具」

この記事は，1930年代後半（昭和12年頃）から1940年代前半（昭和17年頃）に書かれたものであるらしい。この原稿は，1990（平成2）年にちひろ美術館で開催された「赤羽末吉遺作展」のカタログに，記事の切り抜きが図版として掲載されていたものである[37]。文章は，さらに「五，郷土人形」と副題が付けられていることから，当時いずれかの誌上で連載されていたのかもしれない。しかし，本文の内容については，カタログからでは判読できない。絵は赤羽が当時関心を示した搬不倒，すなわち中国の泥人形が，素描として描かれており，その脇には，手書きでその人形の産地がメモの形で記されている。そして，おそらくは赤羽のものと思われる印が隅に押されている。この展覧会のカタログには，図版について「満州時代に新聞や雑誌に発表した記事「新京の郷土玩具」1930年代後半～1940年代前半[38]」というキャプションが付けられているが，その他については不明である。

(9) -5　旧・満州における画家の意義について

この原稿もちひろ美術館に残されていた新聞記事である。発表された題や年代，新聞名は不明である。当時の赤羽は，日本と大陸の風物は異なり，真の満州[39]を描けるのは満州にしっかりと根をおろした満州の画家であり，満州の風物を最も生かす形式の創造芸術が必要である，と旧・満州における自身を含めた画家の意義について考えていた。

満州の画家が広い意味での満州の風物をテーマとすることは，すこぶる自然なことで，好んで観念的に内地風景とか，外国風景とかを描くにあたらない様に思う。近年，時流に遅れじと渡満する内地画家の数は非常なものであるが，一体こうした旅人画家が，1ヶ月ぐらい満州の各地を物珍しげに見て帰り，さて内地で発表されたものを印刷物等で見るが，僭越(せんえつ)ながら満州をシッカリ掴んだものはあまりない様に思われる。然からば，真の満州を描ききるものは誰か。やはり，我々土着の満州画家以外には絶対ない。…日本の風物は大体細い線で構成されているが，満州の風物は太い面で構成されている。先ず，空気の相違から色彩的に大きな変化を見，ぶちぬけるような蒼空，横の風景，泥の面の家，ドロリと濁った砂の面のような河，ピイッときいた原色の点景人物等の明確な面の風景…日本的な概念を捨てこの対象物と四つに組まねばならない。そしてこの対象を最も生かす形式の創造がなされねばならない。このことは非常に至難なことで，私もこれを自分の一生の仕事と腹を決めている[40]。

(9) -6　巽聖歌(たつみせいか)との絵本の取材旅行

終戦の半年前に，日本から来た詩人の巽聖歌(たつみせいか)は，絵本の取材のために牡丹江(ぼたんこう)や付近の開拓団を訪れているが，その際に赤羽も一緒に同行している[41]。しかし，その時の様子や，スケッチ，原稿等はわかっていない。

5.　終戦から引き揚げまで

(1)　終戦間近の旧・満州の様子

赤羽は終戦間近の旧・満州国の首都・新京（長春）の様子を次のように述べている[42]。新京には，駅の一角に細長い城内と呼ばれる中国人のつくった旧市街があった。それに対して，駅の正面の大通りには周囲1kmと言われたロータリーがあり，この円周を囲んで，官庁や銀行，特殊会社の建物がずらりと並んでいた。そこから先は，広々とした大通りがあり，並木を切れば飛行機の滑走路になると言われていた。そこには電柱も電車もなく，水銀灯の灯が点々と暮色の街を彩っていた。

せまくできてしまっている日本の都市では，今さらヨーロッパのような美しい都市づくりは無理である。そこで，この広大な土地を得て，日本人の知恵を集結して理想的な都市を造ろうとしたのが新京だと言える。ビルは4階に規制して大空を見せ，緑が絶え間なく続いていた。しかし，この都市は未完にして潰えた。

赤羽が勤めていた，半官半民の特殊会社・満州電信電話会社は，この周囲1kmの大同広場に面して建っていた。

終戦の一ヶ月ほど前になると，赤羽のような第二国民兵にも点呼招集が行われた。赤羽は昭和初期の軍縮の頃の徴兵検査で，貧弱な体をしていたので丙種合格とされたとい

う。赤羽は会社の集団検診でも治りかけの結核が見つかっており，健康管理中ということで，点呼招集の時でも見学であった。しかし，終戦直前には，ついに赤羽のもとにも招集令状が届いている。ソ連が参戦し，8月9日に旧・満州国内に侵入したことがわかったのは，後日の，当時の記録からであった。しかし，この招集の場合でも，何の訓練も受けていない者ばかりが集まったため，結局は2時間たらずで招集解除となっている。

(2)　終戦の混乱時に出した子どもの本

1945（昭和20）年に第二次世界大戦が終結した時，赤羽は35歳であった。この時の様子を，赤羽は次のように述べている。

> 外地にいて，国という大きな手が背景になって擁護してくれた。終戦と同時にそれが消えて，我々はとり残され，浮き草の身になったのである。道ばたでヒョイと殺されても，抗議も何もできない哀れな身分なのである。我々は，衣類を路傍で売りさばいて細々と生きた[43]。

この時，初めて赤羽は俘虜（ふりょ）という言葉を知ったと述べているが[44]，零下25度の街頭に立ってタバコを売ったり，手作りのものを売ったりして生き抜いた。しかし，こうした混乱の中でも，「学校の火を消すなと，力を合わせて小学校を続けたこと」や，「子どもの本をだしたこと」は，赤羽によれば，「日本人俘虜（ふりょ）たちの心意気」であった。

子どもの本を出したのは，「いつ国に帰れるかわからないこの逆境のなかの子どもを，すこしでも慰めよう」ということから，Kという作家が本を出す相談を赤羽のところへ持ってきたことから始まった。そこで，何人かの作家たちが話を書き，赤羽がさし絵を描いた。この状況下では，凸版のさし絵という訳にもいかないので，赤羽は何枚か年賀用の板にコツコツと彫りつけて，二色刷りの絵を完成させた。表紙は日本のこけしと中国の搬不倒（パンプタオ）を並べて描いたものであったらしい[45]。しかし，何部出して，どう印刷して，どう配布したか，という記憶が，赤羽にはなくなってしまっていた。

こうして，赤羽たちは食べていくために，隣組共同で商売をした。道ばたに小屋を建て，隣組の衣類や家財道具を売るのである。赤羽は，友人の表具屋からふすまの紙類を安くわけてもらって，商売がうまくいっていない人には半額で売ったり，安い紙でも模様が気に入っていると，惜しくて高く売ったりした。「ヘンな商売であった」と赤羽自身が述べているが，こうしたところに赤羽の人柄が垣間見えるように思われる。

その後，ソ連軍に引きついで，中国の共産軍が入ってきた時には，赤羽たちは招集されて共産軍の宣伝用に絵を描かせられている。そして，共産軍が去って，今度は共産軍と敵対関係にある蒋介石軍がやってくると，それまでとは反対に，蒋介石軍のための宣伝用の絵を描いたりしている。

(3)　日本への引き揚げ

赤羽は終戦後，約2年ほど旧・満州に残っていたが，それには二つの理由があった。そ

の理由の一つは，自身の絵の技術を残して欲しい，自身の土俗研究を伝えて欲しい，という願いであった。しかし，それはすでにこの旧・満州における終戦の混乱した状況下では意味を持たなくなっていた。そして，もう一つの理由として，引き揚げ道中の危険から子どもを守ることということがあった。それもこの状況下では，だんだん残っていることの方が危険になってきた。蒋介石軍が駐留している時も，赤羽は何度も生命に関わる危険に遭遇している。そこで，ついに赤羽の一家は日本へ引き揚げることとなる。

1947（昭和22）年頃の7月に新京から南下して奉天を目指し，途中の困難を乗り越えながら，奉天郊外の煙草会社の倉庫に落ち着いた。しかし，日本からの迎えの船が胡蘆島（ころうとう）港まで来ていながら，連絡不備のために奉天まで届かず，結局二ヶ月近くもこの倉庫で足止めされることになった。その間に皆持ち金がなくなり，商売を始める者もいて，赤羽なども頼まれて，手持ちの画材でレッテルの図案を描いたりした。

そして2ヶ月後にようやく船が奉天に着き，日本へと帰国した。赤羽らは，佐世保の引き揚げ者用の収容所に入ったが，ここでも1ヶ月の足止めを余儀なくされている。そして，その間に収容所内で麻疹（はしか）が出た。そしてそれが災いして，その後約半年の間に赤羽の幼い子どもが3人亡くなった[46]。

6. 終戦直後の日本における赤羽の足跡

(1)　フリーの生活

引き揚げ後，しばらく赤羽はフリーでさし絵の仕事をしたりするが，現在のような出版量はなく，あまり仕事はなかった。工芸社という昔なじみの会社が得意先を紹介してくれて，銀座にある三笠会館のデザインの仕事をしたが，生活は不安定だった。また，看板屋の仕事等もした。銀座の三越が開店の時には一晩で50号位の絵を描いたりもした。しかし，赤羽には元来フリーの生活は性に合わなかったようである。家族を食べさせなければならなかった赤羽は，飯田橋の職業安定所に職を求めて並んでいる。そこで，NHKへ行って面接を受けることになり，その時は，結局赤羽を含めて3名がアメリカ大使館の民間情報教育局（CIE）に採用となった。当時，内幸町のNHKの1階にアメリカ駐留軍の一部があった。

(2)　アメリカ大使館民間情報教育局（CIE）

赤羽がアメリカ大使館民間情報教育局（CIE）に就職したのは1949（昭和24）年のことであり，以来20年間，1969（昭和44）年まで赤羽はここに勤務することとなる。赤羽はこの中で，文化交換局という部署に配属されていて，10数人の日本人の絵描きが他にいた。赤羽によると[47]，この文化交換局というのは，アメリカの文化を日本へ紹介するサービスステーションのような所で，民主主義教育の展示物を作って，それを貸し出す所であった。赤羽はこの部署のチーフデザイナーであった。具体的な仕事としては，アメリ

カから子どもの絵や版画が着くと，額縁のデザインを業者に依頼したり，宇宙関係のものがさかんになると，宇宙旅行の研究をしたりして，月世界の模型をプランし，宇宙船の模型や月面探査機等を電気仕掛けで動かしたりした。それは赤羽のロマンを満足させることにも繋がった。こうして，全国各地の博物館から希望があると，この模型を貸し出し，赤羽らが組み立て指導で一緒に付いて行ったりした。こうした出張の後に，赤羽は必ず休暇をとって，スケッチをして歩いた。これは日本各地にわたり，赤羽の宝となった。

(3)　帰国後の制作活動のはじまり　ーカットグラスコンテストと日本童画会ー

旧・満州から引き揚げてきて，少し落ち着くようになると，再び赤羽は自身の制作活動を行うようになる。この頃に，前述のような，子どもの時に夢中になった映画「ジークフリード」の恐竜退治の場面を何枚か絵に描いたりしている[48]。しかし，大事に持っていたスチール写真は，この終戦の引き揚げ時に紛失してしまったのである。

このようにして赤羽は徐々に自身の制作活動を再開させていったようだが，この間のその他の記録は残っていない。赤羽の作品として，帰国後に初めて記録に現れるのは，1955（昭和30）年にアメリカのスチューベングラス社のカットグラスコンテストに入賞した「桃山」という題の付いた作品である。しかし，このコンテストへの出品の経緯や，作品のテーマ等については不明である。

それからまたしばらく時間が経ち，1959（昭和34）年に，今度は日本童画会展に3点の絵画作品を出品している。そして，そのうちの1点である「民話屏風」が茂田井武賞を受賞している。徳永美幸によると，この3点は，いずれも墨絵で描かれた作品で，中でも「民話屏風」は，それぞれ異なる5話の民話を描いて屏風仕立てにしたものであるらしい[49]。他の2点の作品は，「西洋の話をテーマにして描いた作品で，とんがり屋根の家々が並ぶ町並みを背景にして，動物や人物が空を飛んでいる，一見シャガールの作品をモノクロームにしたような幻想的な作品である[50]」ということである。また，『月刊絵本』1976年1月号の「特集 赤羽末吉の絵本」には，ちょうどこの1960（昭和35）年頃に日本童画会展に出品された作品として，アンデルセン童話の「親指姫」をテーマにして描かれた作品の図版が掲載されている[51]。この作品も，この出品された「民話屏風」をはじめとする3点の作品のうちのいずれかに相当しているものと考えられる。

(4)　福音館書店と絵本画家・赤羽末吉の誕生

日本児童画会展で茂田井武賞を受賞したのは1959（昭和34）年のことであるが，赤羽はちょうどこの頃に2度ほど雪国へスケッチをしに出かけている[52]。1957（昭和32）年と1959（昭和34）年のことであるから，日本児童画会展に出品した年と，その2年前にあたることになる。場所は，福島県の裏磐梯[53]や，沼尻という温泉，猪苗代，会津坂下（あいづばんげ），柳津（やないづ），といった町で，小正月に10日間の旅行であった。

この時の雪国行きについては，赤羽が旧・満州時代に満州国国展で特選賞を受賞した「開拓団の子どもたち」の時と同じテーマを，雪国というイメージに凝縮し，もう一度あたため直して制作していた様子が記録から窺われる[54]。赤羽は，この時の問題意識ともう一度向き合いながら，帰国してからの自身の制作活動を再開させていたのだろう。

こうした時期に，赤羽の妻・良子（りょうこ）が，婦人会で偶然，茂田井武の絵本『セロ弾きのゴーシュ』を貰ってきた。この絵本は福音館書店から『こどものとも』として出版されたものだった。これを見たのがきっかけとなり，何の面識も無いまま赤羽は福音館書店へ手紙を書き，日本児童画会展で受賞した作品や，その他いくつかの作品を持って，福音館書店の当時の編集長・松居直を訪ねることとなった。これが1960（昭和35）年のことだったと，松居は後日述べているが[55]，赤羽は1958（昭和33）年のことだったかもしれない[56]，とも述べているので，確かなことはわからない。しかし，この面接後の1961（昭和36）年に赤羽の第一作目の絵本作品『かさじぞう』が出版されているので，その1，2年ほど前のことだったことは確実だと思われる。

この松居とのはじめての面会で，赤羽はテーマとして雪国が描きたいことを告げ，松居はそれにあてはまる物語として，昔話「かさじぞう」を瀬田貞二の再話で制作することを思いついた。そして，完成した原稿を見た松居は，赤羽の物語の読み取り方の確かさと，表現の豊かさ，そして絵本を構成する力の大きさに強烈な印象を持ったと，後年になって述べている[57]。

こうして，赤羽は51歳の時に絵本画家としてデビューすることになるのである。

7. 旧・満州時代に形成された赤羽の芸術観

旧・満州時代は，赤羽自身にとって，さらには時間的に見ても，決して無視することのできなものとなっている。赤羽の芸術観の基盤は，ほぼ，この絵本画家以前の旧・満州時代における生活と，引き揚げ時の体験によって形成されたと考えられる。赤羽は自身の芸術上の目標や，引き揚げ時の体験について，エッセイに詳しく書き残している。

(1) 赤羽の芸術上の理想

正倉院の名作「鳥毛立女屏風 第4扇」，通称「樹下美人」には，赤羽の描きたい絵の理想の全てが詰まっていた。その理想について，赤羽は次のように述べている。

> 私は若いときに，自分はどんな絵が描きたいかと自問自答したことがある。まず深さがほしい。そして高さが，つまり格調の高さがほしい。そして強さと，人間的なやさしさがほしい。つまり，深く高く強くやさしくということになる。
>
> たいへんな欲張りだが，この『樹下美人』にはそれが全部ある[58]。

赤羽の場合，興味深いことに，特にこの「樹下美人」の場合には，赤羽が所持していたような複製品の方がよいということである。

これは〈鳥毛立女（とりげたちおんな）〉といって，鳥の毛がからだにはってあったそうだ。しかし，そんなものがいっさいなくなった現在のがよい。これはふしぎだが，全身だとさのみよさを感じない。結局，この胸部だけの複製のが，ムダがいっさいなく，世にも品格の高い，唐美人のおおどかな美しさが，無限に広がるのである[59]。

これは多分に赤羽の内面的な原体験やイメージ等が関わっているからだろうと考えられる。

さらに赤羽の尊敬する日本画家・村上華岳は，「芸術とは全き人間の姿なり」という言葉を残している[60]。自身の理想はこれと全く一致すると赤羽は述べており，これが赤羽の目標と定められた。赤羽にとっては，この村上華岳の理念を絵画の形にして表したのが，「樹下美人」だったということなのだろう。

(2)　赤羽と「樹下美人」

赤羽はこの自身が理想とする「樹下美人」を，混乱した引き揚げの時にも，肌身離さず持ち歩いていた。当時の赤羽の家族は12歳の子どもを筆頭に，二男二女と老母と嫁の七人であった。この時に許される荷造りは，行李（こうり）[61] 2個と帆布の特大リュック1個であった。赤羽はそのうち，行李1個に家族の衣類を入れ，残りの1個には自身の絵の道具を入れている。そして，帰国してからも，いつでも絵が描けるようにと，赤羽は油絵具の入った箱等を，いくつも小学校3年生だった長男の首にかけて持たせている。そして，カンバス一巻と紙，麻紙，唐紙，画仙紙は，一巻きにしてくくりつけ，そのカンバスの中には，牧野虎雄の10号のケシの花の絵も入れた。また，愛蔵の美術書も，俵屋宗達，小川芋銭，富岡鉄斎，唐・宋・元・明の名画の一部，能面集の中の二枚，花の小面（龍右衛門作），山姥（赤鶴作）等，好きなものだけを最小限はずして持っている。帆布の特大リュックには，子どもの衣類をたくさん詰めて背負うことにした。愛用の筆30本位は，筆巻きに捲き，布の袋に入れ，腰にくくりつけた。そして最後に，自身が理想とする「樹下美人」の複製画を，腹に捲いたさらしの中に入れた。匪賊，馬賊，おいはぎの出没で，こうした荷物はすべて盗られてしまうかもしれない。もし襲われてこの「樹下美人」が奪われるようなことがあれば，それは自身の最後の時だとまで赤羽は思い定めていた。赤羽にとって，この「樹下美人」は，自身の芸術観や，存在そのものと同等のシンボルとしてあったのだと考えられる。

赤羽らが人吉経由で東京に着いたのは11月のことだった。帰国後，多くの困難に遭遇し，自身の子どもを3人も失った赤羽だが，「『樹下美人』は黄色いシミがつき，折れ目は白っぽくなり，ちぎれそうで痛々しかった。しかし美人はキゼンとして豊かであった」と述べている[62]。そして，今度は絵本を通じて「樹下美人」の持っているものの一つ一つを，赤羽なりに極めてゆくことが，赤羽自身の人生だとエッセイの中に記している。

8. 赤羽の長年の想い　―引き揚げ時の文章に見る赤羽の自責の念―

赤羽にとって，旧・満州時代は，若い頃を過ごした青春時代であり，自身の半生であると同時に，罪と自責の念が存在する時代でもあった。こうした赤羽の想いは，自身の引き揚げ時の体験を書いた文章に，特に強く見ることができるように思われる。赤羽は，その時の様子を非常に克明に記している[63)]。

終戦当時，もしソ連軍が新京の街に来れば戦場となり，民間人であっても自決か玉砕の二者択一というのが，当時の悲しい日本人の常識であったという。会社の社宅で一家四人が自決する事件が二件続けて起こり，ただならぬ事態が現実となって，いよいよ覚悟しなければならなくなってきた。

赤羽は社宅である自宅に，赤羽の一家七人を守るために，自身で防空壕を作っていた。東京での空襲の激しさが一応は伝わってきていたが，防空壕を作る家は少なく，赤羽の家の防空壕はなかなかの評判であったらしい。赤羽は自身で防空壕の研究を始め，防空壕相談所やその他の機関で相談したり，ついには皇帝溥儀の防空壕をつくった建築家のところにまで訪ねに行っている。押入の床をあげ，降りると十畳ほどの空間に防空壕を作り，外へ通じる脱出口も二カ所つくった。しかし，実際にソ連機による空襲が始まると，隣組の人たちで防空壕はいっぱいになり，赤羽自身は脱出口の出入り口にいる始末だったらしい。この防空壕は，終戦後は脱出口を埋め，女をかくまったり，医者の薬や近所の財産を隠したり，非常に役立ったという。

8月11日頃に，隣組の招集で，ソ連軍の進撃が意外にはやく，2，3日中に新京に到着するだろうから，家族は全員疎開させるという通達があった。その後，各家族は大混乱となったが，赤羽家では，赤羽の嫁と老母，子ども4人の旅立ちとなり，赤羽一人が新京に残った。そして，関東軍報道部にかり出され，疎開する市民を力づけるポスターを，他の絵描き仲間と共に描いて働いた。後日わかったことだと，作戦上，日本兵は朝鮮国境近い通化（つうか）にほとんど移動しており，新京はカラで，赤羽たちは取り残されていたのである。

8月15日は，関東軍の庁舎の中で赤羽は玉音放送を聞いている。その後，赤羽たちの仕事は変わり，ソ連軍を刺激しないで，やわらかく迎えるためのポスターを描くようになった。やってきたソ連兵は，最初こそおどおどしていたが，徐々に自分たちの優位を知り，銃にものを言わせて略奪や婦女子への暴行等をはじめ，恐怖の夜がしばらく続いたという。

赤羽の家族は朝鮮へ向けて疎開していたので，この難から逃れることができたが，途中，朝鮮と満州の国境安東（あんとう）で終戦になり，下車させられて日本人住宅に分宿させられていた。幸いにも，そこも治安はよかったようである。

その後，少し落ち着いてくると，最初は玉砕覚悟だった赤羽たちも家族のことが気に

なりだし，再び家族が新京に戻ってこれるように計画し，潜行員を出して，何度目かにようやく成功し，家族との合流を果たしている。

ソ連軍の引き揚げ間際になると，人手が必要になることから，突然日本人狩りを行って，数日強制労働をさせる事件が多発するようになり，恐怖の対象は男性に移っていった。

こうした辛酸を舐め尽くした赤羽は，国や民を守ってくれると思えばこそ，数々の横暴とも思える行為にも堪え忍んだが，結局は住民を捨てた日本軍の存在そのものに対して疑問を呈している。そしてさらには，満州にいた赤羽ら自身に対しても，次のようにその疑問の矛先を向けている。

> しかし私たちは，中国人に何も悪いことはしていなかったと，きれいなことがいえるであろうか。私はゾーッとする。
>
> もしかすると，私がもっともきらっていた関東軍の手先の役割を，我々はしていたのではなかろうか。私はまた，からだじゅうが冷たくなり，心がこわばるのである[64]。

こうした心境を，戦後途切れることなく抱き続けながら，赤羽は絵本制作を行い通したのである。

9. おわりに　―未来を担う子どもたちに託した壮大なるロマン―

赤羽の美術に関する活動を見てみると，あらゆる時期を通して必ず子どもの姿が存在している。赤羽は，その子どもたちを直接絵の対象にすることもあれば，その子どもたちに対して様々なテーマを伝えたかったりしたこともあったようである。最後に，赤羽が子どもたちに伝えたかったことを考えてみることで，本論のまとめにしたいと思う。

(1)　国際アンデルセン賞画家賞授賞式挨拶

1980（昭和55）年に，赤羽はそれまでの全業績に対して，国際アンデルセン賞・画家賞を受賞している。その受賞式の挨拶の中で赤羽は次のように述べている。

> 私は絵本を描きだして二十年になりますが，私の絵本の特徴は，日本の古い伝統的な美術の美しさに現代的な解釈を加えたものを，次の世代の子どもたちに伝えたいという気持ちが強く働いたものです[65]。

そして赤羽はこの時，自身が中学生の頃に見た映画「ジークフリード」についても触れている。この映画で赤羽は，「ドイツ映画の重厚さ」「けぶるようなファンタジックな美しい画面」「24人の技師が中で操縦したといわれる巨大なつくりものの火をふく恐竜のみごとさ」「剣をふるって戦うジークフリードの勇壮さ」といった「壮大なロマン」に感動したと述べている[66]。そして，実に強烈な影響を受けたものだと述懐している。これまで赤羽は，なぜ子どもの絵本の世界に入ったのか，という質問に答えられないで来たが，

この頃は，この「ジークフリード」の影響が大きかったのではないかと思うようになったと述べている。

こうした赤羽の原体験に根ざした思いを，後年赤羽は「壮大なるロマン」という言葉によって表現していたようである。後日，赤羽は「壮大なるロマン，壮大なるファンタジーの世界をかき，さらに壮大なるユーモアの世界をかいてみたい[67]」と，自身のつくりたい絵本について，その抱負を明らかにしている。

(2)　絵本作品『あかりの花』の取材旅行におけるもう一つの目的

1984（昭和59）年頃[68]に，赤羽は中国民話を題材にした絵本『あかりの花』の取材旅行のために，福音館書店の松居直らと共に，約40年ぶりに中国へ渡っている。この旅行に行くにあたって，赤羽は『あかりの花』の取材の他に，もう一つ別の目的を内に秘めて持っていた。それは，日中戦争に対して，赤羽なりに中国の人々に謝罪をしたいということだった。赤羽はその心境について，次のように書き残している。

> 私はこんどの旅行に『あかりの花』の取材と，もう一つの目的があった。あの日中戦争に対して，中国の人に私なりに謝罪がしたかった。私は満州に十五年いた。圧迫する立場にいた私は，意識するとしないとにかかわらず，中国人に対して立場上，罪を犯していると思う。日本の犯した罪，自ら犯した罪に対して，謝罪のことばをのべたかった。長年心に想っていたことをのべる機会をえた[69]。

そして赤羽らは，この取材旅行で，北京から貴陽（きよう）にたつ前夜，いろいろ世話をかけた文化関係者に対して一席設けて答礼をしているが，その席上で，赤羽は挨拶とあわせて次のような自身が長年抱いてきた想いを吐露し，謝罪の言葉としている。

> 私の絵の特徴は日本の伝統的なものに近代的な解釈を加えたものです。それに私が中国の東北（トンペイ）に十五年住んで，中国の壮大な天地から学んだひろがりを，画面にとりいれたことです。日本人はすぐれた民族だと思いますが，なにぶん島国ですので，どうしても考え方が小さく縮み思考になりがちです。それに対して，画面のひろがりを強調して，豊かな情感をもたせ，読者の気持ちをひろげようとしたものです。
>
> 我々のこれからの仕事は，すべて国際的なひろがりをもって考えねばなりません。私がいただいた国際アンデルセン賞は，IBBY（国際児童図書評議会）という国際的な平和運動の団体からのものでした。この団体の主旨は，世界の子どもが，子どものときから子どもの出版物を通じて，お互いの国を理解しあう。そのことが世界の平和につながるというものです。私はそのIBBYの会員ですが，その考えをたいせつにして，その道につくしたいと思います。
>
> あの戦争のとき，大人だった私は，中国に対して罪人です。したがって，中国へは観光旅行にはぜったいゆきません。しかし，なにか中国のお役にたつことがあれば，喜んでとんでゆきます。このことを松居さんに話していました。それがこんど

実現したのです[70]。

このように，赤羽にとっての旧・満州時代は，若い頃を過ごした青春時代であり，自身の半生であると同時に，罪と自責の念が存在する時代でもあったのである。赤羽は，こうした自身の遭遇した体験を抱きながら，絵本を通して，未来を担う子どもたちに，お互いの国を理解しあうこと，そのことが，世界の平和につながることだというメッセージを伝えたかったのだと思われる。

参考文献

1) 赤羽末吉『絵本よもやま話』偕成社，1979

2) 赤羽末吉『私の絵本ろん 中・高校生のための絵本入門』平凡社，2005

※本書は，『絵本よもやま話』に続く二冊目のエッセイ集である。1983年に同じく偕成社から単行本として出版されていたが，2005年になって，装いも新たに文庫本として，平凡社から再出版されたものである。本稿は，この2005年度版を参考にしている。

3) 赤羽末吉『影繪芝居の話』満鐵鐵道總局營業局旅客課，1940

4)『赤羽末吉遺作展』いわさきちひろ絵本美術館，1990

5)『月刊 絵本 1976年1月号』すばる書房，1976

6)『月刊 絵本 1979年4月号』すばる書房，1979

掲出図書

1) 赤羽末吉／画，瀬田貞二／再話『かさじぞう』福音館書店，1961

2) 赤羽末吉／画，大塚勇三／再話『スーホの白い馬（改訂版）』福音館書店，1967

※『スーホの白い馬』は，『スーホのしろいうま』という題で，1961年に『こどものとも67号』として一度刊行されている。

3) 赤羽末吉／画，君島久子／再話『あかりの花』福音館書店，1985年

注

1) 満州　中国の東北部をさしていった旧通称。

満州国　日本が満州事変によって占領した中国東北部（現在の黒竜省・吉林省・遼寧省・内モンゴル自治区北東部）につくりあげた傀儡国家。1932年（昭和七），もと清朝の宣統帝溥儀を執政に迎え（三四年には皇帝），中華民国から分離させて建国。首都は新京（長春）。翌年熱河省も加えた。政府の要職には満州人を起用したが，事実上は日本官吏および関東軍の指揮下にあった。四五年，八月，日本の第二次世界

大戦敗北とともに消滅。(松村明／編『大辞林』三省堂，1999　※原文ママ)

※本稿では，以下，旧・満州と表記する。ただし，名称等については混乱を避けるため，当時のままとした。

2)『月刊絵本』編集部「赤羽末吉よもやま話」(『月刊 絵本 1976年1月号』前掲書，p.26，所収)

3) 前掲書，p.27～p.28

4) 前掲書，p.28

5) 赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.66

6) 前掲書，p.68

7) 赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.225～p.227

8) 前掲書，p.79～p.82

9) 藤本朝巳「解説－学ぶことに熱心だった画家」(赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.254，所収)

※その他，この研究所通いについては，赤羽末吉「八島さんと私」(『月刊 絵本 1979年4月号』前掲書，p.30～p.31，所収) に詳しい。赤羽によると，誰に紹介されたのか，池袋の近くの長崎村にあったプロレタリア美術研究所に3ヶ月間通ってデッサンの勉強をした。当時偶然にもそこで講師をしていたのが，後年，アメリカへ渡り，絵本画家として活躍する八島太郎であった。八島は，軍事教練を拒否して東京美術学校を退学となり，プロレタリア美術同盟に参加して，当時の政府批判をした風刺漫画を描き続けたために検束される等，激しい画家として知られている。1908 (明治41) 年生まれの八島は，赤羽よりも二つ年長となる。

10) 赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.80

11) 前掲書，p.79～p.82

12) 赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.11～p.12

13)『月刊絵本』編集部「赤羽末吉よもやま話」(前掲書，p.28)

14) 赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.11

15) 前掲書，p.12

16)『月刊絵本』編集部「赤羽末吉よもやま話」(前掲書，p.29)，および，太田洋愛「搬不倒と赤羽末吉」(同書，p.22～p.23，所収)

17) この太田洋愛は，『月刊絵本1976年1月号』の「特集 赤羽末吉の絵本」に，「搬不倒と赤羽末吉」という題で寄稿している。赤羽の大連(たいれん)における美術に関する活動については，この太田の記述が詳しい。

18)『月刊絵本』編集部「赤羽末吉よもやま話」(前掲書，p.28)

19) ちひろ美術館の徳永美幸は，この時の作品を『影戯』(「影絵人形芝居」) としている。

徳永美幸「絵本画家・赤羽末吉 人と作品」(『赤羽末吉遺作展』前掲書，1990，p.53，所収)

20)「赤羽末吉・略歴」(赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.243～p.244，所収)

21) 徳永美幸によると，当時，赤羽は満州国国展の他に，この「黄土坡(おうどは)展」と，もう一つ「北の護り展」という展覧会にも出品している。しかし，この展覧会の詳細は不明である。(徳永美幸「絵本画家・赤羽末吉 人と作品」(前掲書，p.53))

22) 黄土坡(おうどは)協会のメンバーについては，太田洋愛のエッセイによって明らかにされている（太田洋愛「搬不倒と赤羽末吉 －満州時代の思い出－」前掲書，p.22～p.23）郡菊夫は戦後の東京で建築家として名を成した人物である。その他，関合正明と佐竹禹南は洋画家，近藤清法と赤羽末吉は日本画家である。

23) 赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.82

24) 徳永美幸「絵本画家・赤羽末吉 人と作品」(前掲書，p.54)

25) 前掲書，p.54

26) 前掲書，p.54

27) 赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.143

28) 赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.187～p.190

29) 赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.42～p.43

30) 前掲書，p.43

31) 赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.16

32) 前掲書，p.124～p.129

33) 前掲書，p.125～p.126

34) 柳田国男，三木茂『雪國の民俗』甲鳥書林，1944　(※復刻版 第一法規出版，1977)

35) 赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.192～p.193

36) 前掲書，p.192

37) 徳永美幸「絵本画家・赤羽末吉 人と作品」(前掲書，p.53)

38) 前掲書，p.53

39) ここでは，当時の赤羽の考え方を表すために，そのまま満州と表記した。

40) 徳永美幸「絵本画家・赤羽末吉 人と作品」(前掲書，p.54)

41) 徳永美幸「絵本画家・赤羽末吉 人と作品」(前掲書，p.54)，および，『月刊絵本』編集部「赤羽末吉よもやま話」(前掲書，p.29)

42) 赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.206～p.209

43) 前掲書，p.32

44) 前掲書，p.32～p.33

45) 前掲書，p.33

46）徳永美幸「絵本画家・赤羽末吉 人と作品」（前掲書，p.55）
47）赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.48
48）赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.137
49）徳永美幸「絵本画家・赤羽末吉 人と作品」（前掲書，p.55）
50）前掲書，p.55
51）『月刊絵本 1976年1月号』前掲書，p.2～p.3，所収
52）赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.17～p.23
53）前掲書，p.17，原文ママ
54）前掲書，p.126～127
55）松居直「私のみた赤羽末吉さんの世界」（『月刊絵本1976年1月号』前掲書，p.13，所収）
56）赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.127
57）松居直「私の見た赤羽末吉さんの世界」（前掲書，p.15）
58）赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.223～p.224
59）前掲書，p.224
60）前掲書，p.224
61）行李（こうり）　竹または柳などで編み，衣類や旅行用の荷物などを入れるのに用いるかぶせふた蓋つきの入れもの。（松村明／編『大辞林』前掲書　※原文ママ）
62）赤羽末吉『絵本よもやま話』前掲書，p.239
63）前掲書，p.209～p.222
64）前掲書，p.222
65）赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.222
66）前掲書，p.225～p.226
67）前掲書，p.90～p.91
68）この取材旅行の年については，記録に残っていないのだが，絵本『あかりの花』の出版が1985年であることから，その前年の1984年頃だったと思われる。（赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.183～p.219）
69）赤羽末吉『私の絵本ろん』前掲書，p.196～p.197
70）前掲書，p.197～p.198